

東直子・穂村弘著

『しびれる短歌』

(ちくまプリアー新書)

創作の苦しみや解釈の難しさはあっても、短歌について話すのは楽しいよねということに立ち返った対談である。

東・穂村という老にも若にも届くアンテナを持つ二人によって、恋・食べ物・家族などテーマごとに気を許したおしゃべりが繰り広げられる。答えの出ない疑問も気楽に挙げられている。勉強しているという感じではない。そのうちに、短歌がなければ「知ることでできなかった感覚、時代の気分、世界観」に気づく。

お金や固有名詞をテーマに取り上げた点が大胆である。社会的な制約が比較的小さくなっている現代では、陶酔感漂う短歌が減っているのかもしれない。実際より詩的に書く「素敵バイアス」がかかりにくいようだ。また、経済成長を味わった世代のハイテンションと不況世代の絶望ともいうべき無力感を並べて見ることができ。さらに、歌人とは何か、どうやって歌人になるかを紹介している点も面白い。どの方法がお薦めだとかこうすべきだとか断定するのではないところが心地よい。(中村 恵)

三井ゆき歌集

『池にある石』

(六花書林)

流るるか定住せむか地図ひらき今朝も海辺の街街たづぬ

第九歌集。帯文には「四十年以上に及ぶ東京での生活に区切りをつけて、故郷に近い金沢への移住」とある。まだ移住場所を決めかねているころの歌だ。

行方不明者の数すこし減り死者の数ふえゆくひとひひとひみちのく父に似る眉を剃らずに来しかどもときには細き眉をともしむ
猫の骨いだきて荒川河川敷あるきあるき
きて一万歩越ゆ

東日本大震災への思い、亡き家族への思慕、動植物へ向けるまなざしなどから、残された者としてさみしさと生きる覚悟が感じられる。その一方、乗馬する作者のその歌は勢いがあつて惹かれる。

牝馬ビジョン吾を受け止めし広き背はうねりながらに風を切りゆく
生きるための知恵袋のような歌やユーモラスな歌もあり、静かな歌群の中にアグレッシブな作者が見えて嬉しい。

(水上 芙季)

山内頌子歌集

『シロツメクサを探すだるうに』

(角川書店)

後期印象派の画集を広げた印象に近い。作風は特別突飛ではないが、ひらがなの多い平易な表現が良い。周囲の空間の変化するものとしなないものを閑かに濁らせることなく、ことばという多くのチューブから色を絞って調合している。そしてどっしりとした構図を完成させているようだ。

まだだれも帰ってこないゆうぐれのおわりは晩のはじまりのこと
読み手に作者と同じ景色を見せる技量と、表現上のアンバランスさを巧みに保ち組み立てる特徴が随所にみられる。

枯れたるを供花から抜かんぎちぎちと輪ゴムが茎を束ねていたる
脹脛ちぎれそうなり月の出る帰路の自転車どうも進まぬ
図書館の司書としての歌も多く、業務内容と感覚が一際面白い。

十五日戦後七十一年目われは生者に本を貸しおり
飛躍があつて解明できない歌もあるが、その挑戦は、おもねりすぎではないいけないという警鐘にきこえた。(早坂 葉子)